

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 31 日現在

機関番号：34315

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009～2012

課題番号：21730113

研究課題名（和文）ジンメルの政治理論 紛争による社会統合とヨーロッパのアイデンティティ

研究課題名（英文）Georg Simmel as Political Theorist

研究代表者

野口 雅弘（Noguchi Masahiro）

立命館大学・法学部・准教授

研究者番号：50453973

研究成果の概要（和文）：

本研究において私は、社会学者ゲオルク・ジンメルを「争いの政治理論家」として解釈した。

今日の状態を理解するためには、「鉄の檻」的な官僚制にカリスマ的なリーダーが挑むというウェーバーの議論よりも、「生」（政治）と「形式」（行政）が対立しながらせめぎあうというジンメルのモデルの方が適格的であることを明らかにした。

このほか、政党政治の理法、余所者の政治参加の意義、比較の政治理論、カール・シュミットとの対比など、ジンメルの紛争理論の研究を基礎にしながら、その成果を論文や書籍として発表した。

研究成果の概要（英文）：

In this study I interpreted sociologist Georg Simmel as a political theorist of conflict.

I showed that Simmel's theory of everlasting struggle between "life" (politics) and "form" (administration) is more adequate to contemporary politics than Weber's Model of bureaucracy and charismatic leadership.

Referring to his conflict theory, I published papers and books on party politics, participation of strangers, a theory of "comparison", and Carl Schmitt's Political Romanticism.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
2012 年度	700,000	210,000	910,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：政治学

科研費の分科・細目：政治学、政治学

キーワード：ゲオルク・ジンメル、紛争、社会統合、余所者、ヨーロッパ、マックス・ウェーバー、官僚制、カール・シュミット

1. 研究開始当初の背景

(1) ウェーバーの限界

私はこの研究プロジェクト「ゲオルク・ジンメルの政治理論」をはじめのまで、主としてマックス・ウェーバーの政治理論に取り組んできたし、いまでも継続して取り組んでいる。

そのなかで、ウェーバーの時代的な限界と思われるいくつかの点に直面し、それに対する理論的応答について検討してきた。ウェーバーの限界というのは、彼がドイツの「国民国家」を前提にし、ドイツ・ナショナリストとして議論していることであり、「鉄の檻」的で、合理的な官僚制理解をしていることであり、また類型論的な比較文化論が文化を具体化する本質主義に近い結果になるという点である。

こうしたウェーバーの限界について考えていると、哲学者、社会学者（とされてきた）同時代のジンメルがきわめて面白い議論をしていることに気づいた。

(2) ウェーバーとジンメル

ウェーバーがドイツ国民 Volk を中心として議論しているとすれば、ジンメルは余所者 Fremde について論じている。またウェーバーが近代官僚制の「鉄の檻」について議論しているところで、ジンメルは流動性（リキッド・モダニティ）に注目している。そしてウェーバーが闘争 Kampf について熱心に論じている一方で、ジンメルは争いによる「社会統合」に目を向けている。

国民国家を単位とし、大規模組織とそこにおける管理が大きな意味をもち、「文明の衝突」が避けられないとすれば、ウェーバーの議論には説得力がある。しかし今日問題になっているのはむしろ、単一民族ではなくさまざまな背景をもつハイブリッドな個人からなる政治秩序（EU の挑戦）であり、グローバル化と情報技術の発展による組織のフラット化とリキッド化であり、そして多文化主義化が進むなかでの、民族 Volk を根拠にしない社会統合のあり方である。これらはいずれもジンメルの議論に近い。

(3) ジンメルのアクチュアリティ

従来、政治は国民国家、官僚制、闘争を中心に語られてきた。このときウェーバーは中

心的な位置を占め、これに対してジンメルはマージナルな存在にとどまることになる。しかし、余所者、リキッド・モダニティ、多元的な社会統合が政治の主要課題だとすれば、ジンメルこそ政治理論家として評価されなければならないのではないのか。こうした疑問が研究の出発点であった。

2. 研究の目的

(1) 多元性と社会統合

政治理論の研究者は、個人の自由や社会の多元性を擁護しようとしてきた。もちろんこれは大事なことである。しかし、グローバル化にともない、国内の社会的・経済的な格差が拡大している。また、ドイツのメルケル首相が「ドイツの多文化主義は失敗だった」と発言するなど、文化的な背景を異にする人びとの共存のあり方が重大な問題になってきている。こうしたなかで、価値の多元性を擁護しながら、それでいて粗野なナショナリズムを持ち出すことなく、一定の「社会統合」をいかに実現するかが喫緊の課題になっているのである。

(2) ジンメルへの注目

こうした課題を前にして、私はゲオルク・ジンメルの社会理論に注目した。なぜならジンメルは、紛争があるからこそ社会統合が可能になるとする独自の「争いの社会学」を展開したと同時に、多元的な統一を模索する「ヨーロッパのアイデンティティ」をめぐる現在進行中の議論の先駆でもあり、したがって彼の思想構造の総体が明らかになれば、上記の課題に対して有力な貢献になることが考えたからである。

3. 研究の方法

本研究は、つぎの3つの方法によって、上記の課題にアプローチを試みた。

(1) ジンメル全集の検討

第一は、ゲオルク・ジンメル自身の著作を丹念に検討することである。

これまでジンメルについての総体的な研究がなかったのは、彼のエッセー的な著述ス

タイトルにもよるが、ジンメルの論文や著作の多くが入手できなかったことにも一因があった。2008年に、ズーアカンプ社で刊行されてきたゲオルク・ジンメル全集（Georg-Simmel-Gesamtausgabe 24巻）が完結し、ようやくこうした研究の前提が整った。

（２）インタビュー調査

第二は、ジンメル関係の研究者を訪問し、彼らにインタビューし、意見交換をすることである。

具体的には、ジンメル全集の中心的な編者であり、基本文献 Georg Simmel und die Moderne の編者でもある O. ラムシュテット教授（ビーレフェルト大学）、Georg Simmel's image of modernity など、ジンメルに関する論文を数多く執筆している W. ゲブハルト教授（ボン大学）、その著書 Concepts of Europe in Classical Social Theory のなかで、ジンメルのヨーロッパ論を検討している A. ハリントン博士（リーズ大学、エアフルト大学マックス・ウェーバー研究所）らと面会し、議論する機会を得た。

（３）同時代の文脈における研究

第三は、ジンメルが主として活躍したベルリンを中心にして、彼の同時代の交友関係をさぐり、関連する人びとの図書を渉猟することである。

ジンメルの同時代の知的交流は幅広く、その一端は Buch des Dankes an Georg Simmel のなかに収められている書簡などから知ることができ、またジンメル全集の刊行はこうした研究を可能にした。

ウェーバー、トレルチ、ルカーチなどはもちろんのこと、当時ベルリンにいてジンメルの講義を聞いていた哲学者のヴァルター・ベンヤミン、ジンメルから博士論文の指導を受け、グスタフ・ラートブルフを紹介された文筆家のクルト・ヒラー、ジンメルとは対極的な争いの理論を展開することになる憲法学者のカール・シュミット、東大、東北大で教鞭をとることになるクルト・ジンガー、あるいは表現主義の建築家のブルーノ・タウトなど、多くの交流関係が明らかになった。

結果としては論文などの形で発表できない情報も多かったが、ジンメルの思想形成や同時代の諸議論を理解するうえで、有意義であった。

４．研究成果

本研究の成果は、以下の６点にまとめることができる。

（１）官僚制批判の言説の批判的検討

ジンメルの争いの理論は、今日の政治現象を考えるうえで、きわめてアクチュアルである。

彼は硬直的な対決ではなく、「生」と「形式」の流動的で、相補的な関係に注目している。この議論を私は、現代の官僚制批判をめぐる議論の検討のなかで用いた（『官僚制批判の論理と心理 デモクラシーの友と敵』中公新書、2011年）。

新自由主義的な傾向のなかで、官僚制を一方的に攻撃する「カリスマ」的な政治リーダーに注目が集まりがちではあるが、官僚制的な行政組織をなくしてしまうことはできず、またなくしてしまうわけにもいかない。また今日の行政機構はウェーバーの有名なメタファー「鉄の檻」ではなく、むしろジンメルが描くようなリキッドで、壊れやすいものに変容している。

こうしたなかで抗争しつつも相互に補い合うような関係を継続するというジンメルの視座がきわめて重要になっている。しばしばウェーバーを参照しながらなされる硬直的な反官僚制の議論（カリスマ vs. 官僚制）は、こうしたジンメルの議論を導入することによって修正されなければならないという結論に至った。

なお、このような関係が崩壊した状態をジンメルは「不毛な興奮 sterile Aufgeregtheit」という表現によって言い当てている（「マックス・ウェーバーと官僚制をめぐる情念—sine ira et studio と「不毛な興奮」」『思想』2010年）。

（２）政党政治の基礎理論

ジンメルの争いの議論は、視点は官僚制に関する言説だけではなく、政党政治についても用いることができる。

政治学の基礎概念を検討する著作の中で私は政党政治の理法を「複数の、それほど多すぎない数の政党組織がそれぞれ内部を凝集させ、またそうした政党間の競合関係のなかで相互にリフレクションを誘発しながら一定の合意を形成していく」（「政党」『政治概念の歴史的展開』第六巻、晃洋書房、2013年）と規定した。

これはジンメルの議論をもとにして展開したものである。硬直的な対決を基礎とする政党政治は、一党優位体制か、分極的多党化かに向かい、政党政治そのものを破壊してしまうことになりかねない。これまでほとんど注目されてこなかったが、『社会学』などにおけるジンメルの議論は政党政治の政治理論として評価、検討されるべきであるとの結論にいたった。

(3) 余所者の参加と社会統合

政治参加の議論の文脈で、ジンメルと余所者論の意義を示したことが、本研究における第3の成果である(「参加と動員の変容とデモクラシー」『アクセスデモクラシー論』日本経済評論社、2012年)。

近年の「新しい公共」論や社会的包摂の議論においては、かつての政治参加の議論のコアであった下からの異議申し立てや抗争の契機が後退し、参加と動員の区別がつきにくくなっている。

こうした傾向にともなって、余所者だからこぞできる政治コミュニティへの関与のあり方と、そうした関わりによる社会統合を論じたジンメルの議論は、ますますマージナルな領域へと押しやられているが、そうした理由からますますアクチュアルになってきている。

(4) 政治理論としての比較

ウェーバーの政治理論との対比において、ジンメルの理論を評価するというのが、この研究の出発点であったが、ジンメル研究をすすめることで、私のもともとの専門であるウェーバー理解も進展した。

ウェーバーの文化比較は類型論であり、したがって静態的であるとの批判がそれに対してはしばしばなされてきた。これに対して私は、ウェーバーの比較というのは「複数の概念、類型、あるいは文化を同等の位置にあえて置き入れ、互いに突き合わせることで、相互にリフレクションを誘発せしめるような知の営み」(『比較のエートス

冷戦の終焉以後のマックス・ウェーバー』法政大学出版局、2011年)である、というテーゼを出した。

こうした解釈は、ジンメルの争いの社会理論をウェーバー研究に持ち込んだものであり、本研究の重要な成果の一つであるといえる。

(5) ジンメルとシュミット

最後の成果は、ゲオルク・ジンメルとカール・シュミットの理論的な対比が、争いについての政治思想史上きわめて重要だということを指摘した点である(「決められない政治についての考察」、シュミット『政治的ロマン主義』みすず書房、2012年の「解説」として所収)。

「友/敵」の思想家シュミットは、『政治的ロマン主義』のなかで、決定できない主体としてロマン主義の精神構造を問題にする。そのなかで彼が取り上げるのが「社交 Geselligkeit」である。

「社交」は、差異や個性をお互いに引き立て合いながら、会話を継続していくことを主たる目的とする。価値の対立はこうした会話

のなかで無害化さ、余所者も会話のなかに包摂される。ユダヤ人であったジンメルはドイツの国民国家の首都にいて、そうした同質性にもとづく結合を相対化しながら、「社交」を実践していた。しかし、これはシュミットからすれば、あれか、これかを決められない、非決断の政治ということになる。これは紛争の政治理論において、決定的に重要な論点である。

もっとも、シュミットがジンメルに言及することはきわめて少ないのも事実である。その主要著作における言及はない。しかし、ストラスブールからベルリンに移ったシュミットは、ベルリンのスター教授で、晩年ストラスブールに来たジンメルを知らなかったはずはない。Ingeborg Villinger, Carl Schmitts Kulturkritik der Moderne, Akademie Verlag, 1995 など、初期シュミットの研究では、その痕跡が確認されている。この論点については、今後も、未公開のアルヒーフなどで、さらに調べる予定である。

(6) ヨーロッパ論について

本研究は、その課題名のサブタイトルにあるように、「ヨーロッパのアイデンティティ」に関するコンテンポラリーな議論を、ジンメルを参照しながら検討することを重要な柱としてきた。

ドイツのシュレーダー政権(社会民主党と緑の党の連立政権)以降、ドイツ人であることと、ヨーロッパ人であることはなんら矛盾せず、むしろ双方が必要だという議論がなされるようになった。これは、複数の社会圏への複合的な所属について社会学的に考察したジンメルが「ヨーロッパの理念 Die Idee Europa」(1915年)などで論じている議論にきわめて近いものであることが明らかになった。

また、Cécile Rol, Christian Papilloud (Hrsg.), Soziologie als Möglichkeit. 100 Jahre Georg Simmels Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung, Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften, 2009 に所収の Theresa Wobbe, Mit anderen Augen. Gesellschaftlichkeit und supranationale Systembildung im Blickpunkt der Soziologie Georg Simmels など、ジンメルのヨーロッパ論を検討した研究も

刊行されている。

このあたりを中心にしながら、近年のヨーロッパの思想を整理しようと考えていたが、最近刊行されているヨーロッパ研究のあまりの膨大さゆえに、十分な見通しが立てられず、この研究プロジェクトの期間内に論文のかたちで成果を発表することはできなかった。この課題については、今後も研究を継続したいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

野口雅弘、「マックス・ウェーバーと官僚制をめぐる情念—sine ira et studioと「不毛な興奮」」、『思想』、査読なし、1033号、2010年、112-127頁。

野口雅弘、「脱官僚と決定の負荷—政治的口マン主義をめぐる考察」、『現代思想』、査読なし、第38巻2号、2010年、110-119頁。

野口雅弘、「比較の理由—「儒教とピューリタニズム」再読」、『創文』、査読なし、520号、2009年、14-17頁。

〔学会発表〕(計3件)

Masahiro Noguchi, "The experience of legal-cultural interaction and selective reception of Weber's so-called sociology of law in Japan," Law as Culture. Max Weber's Comparative Cultural Sociology of Law, 25-27 Oct. 2012, Käte Hamburger Kolleg "RechtalsKultur", Bonn ドイツ。

Masahiro Noguchi, "American Conservative Intellectuals and the Poverty of Comparison," 大阪大学グローバルCOE"Conflict Studies in the Humanities"の国際シンポジウム Intellectuals and the Democratic Movements of 1989-91, 10-12 March 2011, 大阪。

Masahiro Noguchi, "Reflections on Passion in Max Weber's Works on Bureaucracy: "Sine Ira et Studio" and "Sterile Excitation"," マックス・ウェーバー研究の専門雑誌 Max Weber Studies とイギリス社会学会の共催による国際シンポジウム Max Weber and the reconfiguration of modernity, 1-3, September 2010, Cambridge イギリス。

〔図書〕(計6件)

野口雅弘(共著)、晃洋書房、『政治概念の歴史的展開』第六巻、2013年、168-188頁。

野口雅弘(共訳)、みすず書房、ヴォルフガング・シュヴェントカー『マックス・ウェーバーの日本—受容史の研究1905-1995』、2013年、456頁。

野口雅弘(解説)、みすず書房、カール・シュミット『政治的口マン主義』、2012年、251-266頁。

野口雅弘(共著)、日本経済評論社、『アクセスデモクラシー論』、2012年、52-71頁。

野口雅弘(単著)、法政大学出版局、『比較のエートス—冷戦の終焉以後のマックス・ウェーバー』、2011年、256頁。

野口雅弘(単著)、中央公論新社、『官僚制批判の論理と心理—デモクラシーの友と敵』、2011年、187頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

野口 雅弘 (Noguchi Masahiro)

立命館大学・法学部・准教授

研究者番号：50453973

(2)研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3)連携研究者

なし ()

研究者番号：